

平成 2010 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間： 2006 ～ 2009
 課題番号： 18520242
 研究課題名 (和文) ヨーロッパの公共文化空間の変遷ードイツ語圏の演劇表現と制度ー
 研究課題名 (英文) The diversity of the cultural systems in Europe - analysis of the theater-system and its representation in German-speaking countries

研究代表者

新野 守広 (NIINO MORIHIRO)
 立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授
 研究者番号：00228131

研究成果の概要 (和文)：ドイツ語圏の劇場が公共文化空間の担い手として行っている活動の実態を調査するとともに、その演劇表現の先端的な特徴をさまざまな具体例とともに分析した。とくにベルリンの公共劇場の実際の活動を詳しく調査し、その表現のポストドラマ演劇的傾向を指摘した。演劇学から都市論、メディア論等の学際的な研究成果を踏まえると、現在のドイツ語圏の公共劇場制度とその舞台表現は、モダニズム以降のヨーロッパ社会が模索する文化のあり方ととらえることができた。

研究成果の概要 (英文)：This research project has investigated the cultural systems in Europe to show that the public theatre system is one of the most important part of the cultural spaces in German-speaking countries. Not only the subsidization, but also the representations of the main stream theatre, especially in Berlin, were investigated and some of the new tendencies were clarified.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	720,000	4,020,000

研究分野：ドイツ語圏の演劇

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：独文学

1. 研究開始当初の背景

近年、日本において、公共の文化を充実するためには何が必要かが真剣に議論され、公に検討されるようになった。背景としては、いわゆる「箱もの行政」への反省がある。20世紀後半、とくにバブル期以降、大都市圏にも地方にも劇場やコンサート・ホール美術館、博物館が次々に建設されたが、今世紀に入り、

長引く不況のあおりを受け、とくに金融危機以後、その多くは経済的に行き詰まり、地域の文化の拠点として根付くまでには至らなかった。これらの文化施設では予算や人員が削減され、独自の活動を行う余裕が徐々に失われていったのである。

一方、ヨーロッパ諸国では、公的助成制度によって芸術、文学、演劇、音楽などの文化

活動を育成し、市民の文化活動を守るとともに、様々な公共文化空間を市民に提供し、自由で豊かな文化生活を制度的に保障している。多くの国では、大都市のみならず地方都市にも劇場やオペラハウスがあり、俳優、演出家、ダンサー、美術スタッフなどを雇用し、地域文化を担うセンターとして機能させている。公共の文化の担い手という観点から考えると、日本の劇場とヨーロッパ諸国の劇場は、地域文化の拠点としての性格が大きく異なっている。日本の劇場はあくまでも貸し小屋としての性格が強く、その役割は、すでに活動する文化団体に表現の場を提供するにとどまるのに対して、ヨーロッパの劇場は俳優、演出、学芸などの専門職を雇用し、地域の文化度を高める自立した文化拠点として存在している。

もちろんヨーロッパ諸国の間では、それぞれの国情に応じて、文化政策の実情は異なっている。たとえばドイツの文化予算の総額は、フランスやイタリアをはじめとする他のヨーロッパ諸国と比較すると、特に多いというわけではない。しかし文化予算に占める演劇への公的助成金の割合は、他のヨーロッパ諸国の文化予算における演劇の占める割合と比べて圧倒的に大きく、額も群を抜いている。その歴史的背景はなにか。公共文化空間としての演劇は、今日の経済のグローバル化のもとでどのような展望を持っているのか。演劇文化の振興を図る意義は、どこにあるのだろうか。

本研究の研究代表者新野守広は、日本とヨーロッパ、とくに日本とドイツとの文化制度と表現の違いがどこから来るのか、強い興味を抱き、以上の問いを念頭に置きながら、ドイツ語圏の演劇表現と制度を調査し、グローバル化する現代社会の中で公共文化空間としての演劇の有効性と問題点はどこにあるか、さらにまた、演劇の有効性は個々の文化の差を超えて一般化できないかどうか、明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

本研究はドイツ語圏の演劇制度を対象に、ヨーロッパ諸国の公共文化制度の特色と現状をその歴史的背景とともにあきらかにすることを目的としている。経済のグローバル化が加速するなか、ドイツ語圏諸国では、手厚い公的助成制度によって芸術、文学、演劇、音楽などの文化活動を育成し、自由な経済活動に一線を画して市民の文化活動を守るとともに、様々な公共文化空間を市民に提供して、自由で豊かな文化生活を制度的に保障している。そのなかでも特に公共文化空間としての演劇は、十九世紀に近代国家の形成と密接な関わりを持って成立し、戦後の東西ドイツ分断時代を経て今日に至るまで、常に国家

の政策と連動して運営されてきた。本研究の目的は、文献調査、ならびに現地の劇場、教育機関、演劇祭の訪問調査を通して、今日の経済のグローバル化のもとで演劇文化の振興を図る意義と展望、ドイツ語圏諸国内での政策的な意義付け、これらの制度的な議論が舞台芸術としての演劇表現に与える影響を具体的に明らかにするところにある。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」を達成するため、本研究では以下の4つの方法を採用した。

(1) 研究図書の整備

本研究は、研究の対象を作家研究、戯曲研究、作品上演史、劇場史から舞台表象と社会制度一般の関係に広げ、さらに西欧近代史における公共文化空間の形成と変遷という大枠として設定して、その共時的・通時的連関の中に研究対象を位置付けるものである。したがって、従来からのドイツ演劇研究に必要な作家研究、戯曲研究、作品上演史、劇場史上の研究文献の収集を継続することはもちろんのこと、それ以外に都市論、建築史、近代国家形成史、メディア論等の近代国家の文化空間の表象に関する多方面にわたる基礎的文献の収集・整理をはかる。

(2) ドイツ語圏各地の公共劇場、および地域のアートセンターの活動実態の調査

ドイツ語圏各地で地域の文化活動の中核を担っている公共劇場やアートセンターに活動の実態を照会し、活動状況を示すパンフレット等の公刊物、映像資料、統計資料などの収集に努める。

(3) 演劇資料アーカイブ調査

以上の学問的基礎的文献、およびさまざまな劇場活動の資料の収集・整理に加えて、複数の演劇資料アーカイブを調査する。調査対象は、①ベルリン芸術アカデミーの演劇アーカイブ、②ベルリン自由大学演劇学研究所の映像ライブラリー、③ベルリン・ドイツ座のアーカイブ、④ベルリン・フォルクスビューネのアーカイブである。

(4) 実際の舞台作品の分析

本研究の研究代表者新野守広は、毎年5月にベルリンで開催される演劇祭「ベルリンの出会い」を毎年部分的に訪問してきた。さらに本研究の最終年度にあたる2009年度は、本務校の長期海外研修期間と重なることになったため、公共文化の担い手である劇場がどのような表現活動を展開しているかを実際に体験し、さまざまな舞台表現の比較と分析を試み、近年のドイツ語圏の演劇表現で指摘されることの多いポストドラマ演劇的傾

向を観察することを方法の一つとすることにした。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」の区分にしたがって、それぞれの研究成果を以下に列挙する。

(1) 研究図書の整備

本研究を開始した時点において、立教大学の研究図書は、ドイツ語圏の個々の劇作家の作家研究、戯曲研究、作品上演史、劇場史を中心に整備されており、本研究を進める上で研究環境は充実していた。そこでさらに3.(1)に列挙したドイツ演劇研究上の研究文献の拡充に努めるとともに、都市論、建築史、近代国家形成史、メディア論等の近代国家の文化空間の表象に関するさまざまな基礎的文献を広範囲に集めることができた。これら収集した文献は、以下(2)から(4)の研究活動の基礎知識として欠かすことができなかった。また、収集した文献の分析の成果は、「5. 主な発表論文等」に挙げた「①新野守広、溢れるドラマーメディア社会における演劇の姿、思想、第995号、2007年、4-20頁」、および「⑤Morihiro Niino, Zwischen Gestern und Heute - Die Organisationsstruktur des Theaters, Recherchen 64, Theater der Zeit, 2009年、22-29頁」に詳述した。

(2) ドイツ語圏各地の公共劇場、および地域のアートセンターの活動実態の調査

本研究を開始した時点では、ドイツ語圏各地の公共劇場、および地域のアートセンターとコンタクトを取り、パンフレットやプログラム等の収集を通してその活動実態を調査することを目指したが、ドイツ連邦共和国内ですら100を超える劇場やアートセンターがあるため、それらのひとつ一つに直接コンタクトを取って広範囲に資料を収集することは本研究代表者新野守広一人の手では不可能であり、結局調査対象を絞らざるを得なかった。すなわち調査対象は、ベルリンの主要な公共劇場であるドイツ座、ベルリナー・アンサンブル、フォルクスビューネ、シャウビューネ、マクシム・ゴーリキ劇場、グリプス劇場に絞った。このように調査対象を絞ったことで、公共劇場の活動の実態の把握は容易になった。

また、本研究の最終年度にあたる2009年度は、研究代表者新野守広の本務校における長期海外研修期間と重なったため、これらの6劇場と演劇祭「ベルリンの出会い」の実際の活動を丹念に調査できた。すなわち公共劇場の制作関係者、ならびに現地で活躍する劇作家、演出家にインタビューを行い、公共劇場ならではの劇場運営の実態を制作と実作者の双方の側から観察し、その特色を分析す

る機会を得た。また、演劇祭「ベルリンの出会い」事務局を訪れ、その歴史、理念、組織について説明を受けるとともに、運営の実態を見学した。ヨーロッパの他地域の代表的な演劇祭とは異なり、「ベルリンの出会い」はシーズン中のドイツ語圏の各劇場の舞台から10作品を選び、ベルリンの複数の劇場に招聘する独自のやり方をしている点に特色があった。

これらの調査結果は、「5. 主な発表論文等」に挙げた「②新野守広、ルネ・ボレシュとポストドラマ演劇、舞台芸術、第10号、2006年、127-135頁」、「④新野守広、豊かな社会の後に来る演劇 - 東京とベルリンの可能性、大航海、査読無、第58号、2006年、130-135頁」、「⑥新野守広、ベルリンの壁崩壊から二〇年—ドイツ演劇の現在、シアターアーツ、第40号、2009年、73-78頁」、および「⑦新野守広、ドイツ語圏の演劇のポストドラマ的な傾向について、立教大学異文化コミュニケーション学部紀要、第2号、2010年、31-44頁」に詳述した。

(3) 演劇資料アーカイブ調査

ドイツ国内のアーカイブ調査では、それぞれのアーカイブに応じて他のアーカイブと異なる特徴があった。まず①ベルリン芸術アカデミーの演劇アーカイブは、東ドイツ時代の舞台の貴重な記録映像と舞台資料を所蔵しており、その閲覧は本研究を進める上で、不可欠の資料となった。次に②ベルリン自由大学演劇学研究所の映像ライブラリーは、西ドイツの60年代の演劇革新時代の記録映像から、最新の舞台映像まで、実に広範囲に幅広い舞台映像を保管しており、研究を進める上で非常に有益だった。これら①と②の映像と資料を通して、冷戦期に演劇がどのような文化政策上の役割を担ったかが明らかになった。また、③ベルリン・ドイツ座の資料アーカイブと④ベルリン・フォルクスビューネの資料アーカイブには、具体的な個々の上演作品に関連した資料が保管されており、個別の舞台表現の分析をする上で、非常に役に立った。

(4) 実際の舞台作品の分析

(2)で挙げた6劇場と演劇祭「ベルリンの出会い」の舞台作品を実際に体験し、そこで得られた知見をポストドラマ演劇として分析し、「5. 主な発表論文等」の「⑦新野守広、ドイツ語圏の演劇のポストドラマ的な傾向について、立教大学異文化コミュニケーション学部紀要、第2号、2010年、31-44頁」に発表した。

研究最終年度が長期海外研修期間と重なったため、研究開始年度から継続的に実施してきた文献、資料の収集、データの整理に加

えて、ドイツ連邦共和国における現地調査、研究発表を行なうことができたことは、本研究を進める上で最大の幸運だった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 新野守広、ドイツ語圏の演劇のポストドラマ的な傾向について、立教大学異文化コミュニケーション学部紀要、査読無、第2号、2010年、31-44頁
- ② Morihiro Niino, Zwischen Gestern und Heute - Die Organisationsstruktur des Theaters, Recherchen 64, Theater der Zeit, 2009年、22-29頁
- ③ 新野守広、ベルリンの壁崩壊から二〇年—ドイツ演劇の現在、シアターアーツ、査読無、第40号、2009年、73-78頁
- ④ 新野守広、溢れるドラマーメディア社会における演劇の姿、思想、査読無、第995号、2007年、4-20頁
- ⑤ 新野守広、ルネ・ポレシュとポストドラマ演劇、舞台芸術、査読無、第10号、2006年、127-135頁
- ⑥ Morihiro Niino, Zwischen Gestern und Heute - Die Organisationsstrukturen des Theaters in einer Konsumgesellschaft, Theater der Zeit; Japan-Insert, Heft 9, 2006, S.3-4.
- ⑦ 新野守広、豊かな社会の後に来る演劇 — 東京とベルリンの可能性、大航海、査読無、第58号、2006年、130-135頁

[学会発表] (計2件)

- ① Morihiro Niino, Armin Petras and Sakate Yoji; Tendencies of the socio-critical theatre in Germany and Japan, Symposium Japanese Theatre Transcultural, 2009年11月、Universität Trier
- ② Morihiro Niino, Zur Diskussion über die kulturelle Identität - Die Inszenierung von Junji KINOSHITA's „Ein Japaner namens Otto“, アジア・ゲルマニスト会議、2008年8月、金沢星稜大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新野 守広 (NIINO MORIHIRO)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00228131

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし